

ピアホームだより

2016. 11. 10

第59回日本病院・地域精神医学会 に参加して

サポート頂いている専門の方々が会員になっているこの学会に参加して7年、若干当初の熱情を失なってしまいましたが、今回の学会は陽和病院が事務局？会場は練馬文化センター—ということで参加しないわけにはいかないと心を決め、プログラムを選びました。

知り合いが座長を務めるセッション—特に顧問白石先生—には必ず顔を出すと思いつつ計画を立て、まず、13日（木）シンポジウムⅢ、地域を耕す（精神技術研究所畠山先生）に参加することにしました。内容がグループホームの問題意識と近く興味深く聞くことができました。

私の学会のお目当てはいつも有名人を招いての公開講座—今回は小説家小池真理子

さんの講演「私たちがふだん心の中に隠していること」を聞いてきました。

小池真理子さんの名前は知っているものの、キッチリ一冊の本も読んだことがなく、断片的な情報でイメージが出来上がっていました。

ところが講演を聞いて心を揺さぶられましたので、ホットな気持ちのうちに講演のことを書きたいと思います。

講演は、小池さんが人生でその都度遭遇し考えてきたことを題材として小説を書いたことを伝える内容でしたが、年代の近い私にはまるで自分の人生を振り返る時間のように思えたからです。

私が勝手に共通点を探し共感したことですが—転勤族だったこと、性格的に社交的でなかったこと（妹さんが強迫神経症）で自分は一人にいるような子であったこと、その人が高校で全共闘運動の渦中で闘争委員長になって活動した—おそらく人生の方向を決めた大きなきっかけ？

私も転勤族、田舎育ちで近所の子供も少なく、セミやトンボそして蟻と遊んでいる一人にいることの多い子供でした。大学入学、時

は全共闘運動真っ盛り、そのことすら知らず入学した私は3年次には薬学部自治会の副委員長になっていました。その後の人生にどんなに大きな影響を与えたことか計り知れません。

怪奇・街奇小説が好き、また「小説は反道徳的なもの、世間で普段隠してるものを表現するもの」との小説感—運動の中で多くの交流を持ち触発される中、私もこの世界の面白さも知りました。

現在は、父の死、母の認知症に直面しオール読物で安楽死について連載を書いているそうです。私は父母を見送ってそれを卒業？障害の一人っ子を持ち、今は命を繋ぐということの大きな意味をしきりと考えます。

どうしてもお話ししたくなって、「沈黙の人」を購入しサインを頂くために並びました。短い時間で早口で思いをお話ししましたが—いきなりで通じなかったでしょうね？

今回は、自分の思い出話風になってしまいましたが、次の機会にシンポジウムの報告もできればと思います。

今月の予定

<11月5日>町田で白石先生講演会